

# 小田原史談

第 7 号

発行所 小田原史談会  
小田原市幸一丁目内  
郷土文化館

## 現代 小田原大秘録 (五)

### 石井富之助

器量すぐれた人はその職の功によって名を現わすと云う。此の頃御近習に石原伴右衛門、吉岡儀太夫、畔柳金十郎等器量あることで聞えていた。君もまたこの外御寵愛遊ばされていた中にも石原伴右衛門は非常に発明で君の御心にかない御庭へ下りようと思召される時はこれを祭して御草履をなおし、塩辛いものを召上った時は御茶を奉るというようにまことに行き届き由井民部之助ともいうべき器量であったから、君も才智の者とお考えになったであろう。彼等は発明の者であるから近習にはもったいないと御年寄役を仰せつけられた。

此の年の冬、御国元において無手勝流捕手の達人が病死して流儀が絶えてしまった。それを御聞きになられた吉岡儀太夫は「楳田甚六が末期に及びましたが、然るべき高弟もございませぬ。これによって書物残らず焼捨てたとのことで、その他流儀破滅と相なりました」と御答へした。

伝授しよう。われまた病中でなんじに仕勝つよりならば御用にも立ち難い。その時は書物は残らず焼き捨てるよう」と妻にも申しおき高弟と勝負を望んだ。一人も進む者がなく、皆々到底及びませぬと申したので、書物に火をかけ、南無阿彌陀仏と三度唱へて享保十九年甲寅十一月二十七日そのまゝ息は絶えた。甚六の妻もこれを見て落涙しながら残った書物をことごとく焼き捨てた。太守はこれをお聞きになって、双方とも不徳と仰せられたということである。

これはさておき、この時分御使者役に楠田小仲太という者があって、御前から門兵衛という名を拝領したその由来を尋ねると、ある日御使者として小笠原右近将監殿へ遣わされたが、その節大広間の向うのついたに、楠大門兵衛正成が床机に腰かけ息正行に一卷の書をゆずる絵があつた。まことに生けるがごとくであったので、楠田はこれに氣をとられてながめていた。その時御取次衆がまかり出て御名前はと聞いた。楠田は楠大門兵衛と申すと答へた。御取次衆はおもしろき名もあるものかなと心得て、そのことを申し上げた。その後殿中で君と小笠原様とお会いになった時、小笠原殿は大守様に「貴君の御家来衆の中には家柄の者が多いと承つていますが」と御尋ねになった。

「拙者家来に相馬渡辺をはじめ須田里見などというのがあります」と太守が言う。「しかし先達って御使者に遣はされたのは楠大門兵衛と申すよし、あれらは珍らしい」と小笠原様は言う。御即智の君なので「それはお間違いでしょ。わが家来に楠家はありませぬ。それは楠田門兵衛だろうと思ひます」と御答へになつて御歸還のみぎり楠田小仲太を召し、門兵衛という名を下しおかれた。その時吉岡儀太夫、畔柳十郎をはじめ御近習等を召しているく、武家評判をなされたが

「いかになんじ等日本で誠忠の臣というのはい体誰だと思ふ」と御聞きになった。人々いろ／＼考えて「四十七騎、弁慶、正成などでありましようか」と申し上げると、君はお笑いになつて「あれらは有るべきはずのこと、たゞ義を立てたるばかりで、われ等の臣は皆このようであらうと思ふ」との仰せに一同りはっりと頭を下げて一句も出なかつた。

### 寒 明

清水専吉郎

寒朝將起食暖床  
決然離立着衣袴  
大氣呼吸出庭前  
植花覆郁迎吾笑

家申あひもの終日御遊船の上、小川町の上屋敷に入らせられた。

# 風外上人と定光院の末路

穂坂 辰己

此の刻銘の文字はすべて専門家に任かすとするか、田島村の穴は現実に別に立証する何物もない様であるが上會我の岩窟の方が風外壁止の跡を実証するに明確な根拠であると竹内先生が悦んだ。

さて主題の定光院であるが現今は、其の跡へ民家があつて仮住したと思ふ証拠は何物もないが、たゞ土地の長老の人が「風けい屋敷」と呼んでいたと云う丈の事で定光院に始めは住んだと推定されるのである。

上人の事は専門家に任かすとして主題の定光院の末路を茲に託したいと思ふ。

以下の記録は會我谷津大光院の寺宝として院主の神保行恵氏が保管して置く。

以下原文のまゝ、

上會我定光院、不動明王、會我谷津大光院に納めるの由来。

不動尊、木立像御丈一尺六寸

弁迦羅童子、木立像御丈九寸五分

制迦童子木立像御丈九寸

## 新年漫筆

### 外郎の虎と早雲寺の虎

中野 敬次郎

候  
誠に手入れ無れ破れ致置候故、御本尊皆くづれ居候、其の時、上會我より修理彩色料灯明料として金五円納申候故、小田原高梨町仏師富田藤五郎に頼み取りつくるわけ候、上會我村より小本尊送りのく六人程当院に参り、新曆正月二十七日旧曆正月六日に当り開眼、新

曆三月十八日旧曆二月二十六日に当るなり。追記不動尊伺ひの人、大光院側十名、定光院側送りの人五名右の氏名も列記してあるも略す。

いづれにしても定光院と風外上人とは関係があつたと推定し合せて定光院の末路を託した次第である。

(終)

厨子共に当院に納める者也一、抑々此の本尊儀、山城国京都当山修験三宝院宮末相模国足柄上郡上會我竹の内久保、定光院の本尊に候右同院承らく無任寺にて院内大破に及候処、同久保三嶋神社の社え入置候、明治元二丑年より御一新に付き神仏混合の御引別となり、亦々同久保千体堂へ置入候え共、各堂も廢堂となり村の学校となり、其の爲入置きがたき故舞戸久保大仙竺土寺に頼み右寺の境内の保命大権現の社へ置入候え共小僧大いに戒められ九本尊あばれ申し候、寺の住職村役場を参りつぶさに語り本尊を置入る事を断り致し候村役場の取りあつかう所ではないと断り申候、其の後村の寄り合ひの節、村方え此の処え置方を相談いたし候、村方の者の内會我谷津大光院の信者の者ありて大光院に参り願ひに付き引取る事に致し候、明治十二己卯年新曆正月二十七日大光院より富士講の者又は信心の者伺ひに参り引取り申し

外郎家は京都在住時代には屋号を用いていないし、小田原に移つてからも北条時代には名乗っていないが、外郎家が京都にいた頃から透頂香を売っていたが、葉だといふので知られ世人が外郎の葉と呼んで珍重したといふが、家の本職は足利将軍に仕える儒医であった小田原に移つた藤右衛門尉定治は、京都在住の頃に、將軍義政の令によつて大和源氏宇野氏の継となつて宇野加賀守とも名乗つておつて、北条氏の招に依つて小田原に來住してからも、正

式に宇野氏を称して武家として仕えていたのであつた所領も武蔵国今成郷(河越)を持つて代官職をつとめ後に武蔵在原郡高幡郷、上野国新田莊、同国館林田島郷などを加増されておつて一方では家伝のいろいろ薬を広く關八州に販賣しながら、北条氏に仕える有力な武士の一家であつたので、屋号を称することもなく、家も八棟連ながら、構は武家風で店頭を飾るというよ

うなことはしなかつた。ところが、天正十八年(一五九〇)小田原戦役で豊臣

秀吉のために北条氏が滅されたとき、秀吉は北条氏の一族家臣の武家は一軒も小田原城下に残さぬ方針で、士分の者は全部小田原を落ちて行ったが、秀吉が小田原に入城してから外郎家を「誠に由緒ある家柄であり、透頂香も世に類稀なる名薬であるから是非保存せよ」とのこと、武家を止めて、医業と薬業とを専業として商家となつて永く小田原に留るようにとの命令であつた。これから宇野家をもとの外郎家にかえし商家となつて屋号を虎屋と称するに至つたらしい。

虎屋と言つた理由は、同家には祖先の陳宗敬が中国から歸化した時にもたらしたといふ木彫の虎があつて重代の家宝として珍重していたところから、この屋号を用いたらしい。

しかし、この家宝の虎は初めは秘蔵しておつて、これとは別に店先には板襖に大きな雌雄兩虎の絵が描かれていて、東海道の道路上がりから見え外郎の虎として頗る名物であつた。

幕末の小田原大火で失われて今は見ることができないが、幸なことに、寛政九年

版行された東海道名所図繪の中に精密な外郎家店先の絵があつて、その中にこの襖絵の兩虎の姿が見え、昔の外郎店先の堂々たる風格がわかり、外郎の虎が名物として世に聞えたのもさもあるうと思われる。この絵は誰が描いたのか同家に所伝がないが、東海道名所図繪巻五所載の絵図を見ると家は例の八方白壁の八棟道の宏大な構えであり、東海道の道路に面して軒先に「うしろ」と書いた丸看板がつるしてあり、店先に這入ると、向つて右側に「透頂香」と記した大きな漆塗衝立が立てゝある。問題の兩虎の絵は店先と奥部屋との仕切りにはめられた壁板に「ばい」描かれてあつて、玄關真正面に雌虎、右側に雄虎で、一枚が長さ二間くらいあり、雌雄とも表道路をにらんでいるから、こゝを通る人は誰でもすぐ目につく管で、虎屋外郎と言つて名物になつたのも無理はない。あたりを庄する誠に立派なものであつた。

この図面を見て、すぐ私の頭に浮んだのが、箱根湯本早雲寺の方丈に描かれてい

正面向って右に雄虎、左に雌虎を描いた配置から、両虎のとっている姿態まで、外郎家のものと、早雲寺のものとは非常によく似ている。

早雲寺の方丈の襖絵は北条時代の遺品として有名なもので、一方に巨龍を描いているので、龍虎の襖と言われている。寺伝によると狩野古法眼元信の作と言うことになってゐる。残念なことに両虎の眼のところが破損しているが、これは明かに意識して眼を抜いたものであつて、いつの頃損傷したものかわからぬが、話によると、虎が夜な／＼横を抜け出して外に出てあばれるので、眼をとつてしまつたのだといふことである。

いづれにしても非常に、作風雄渾で優秀な作品であるので昔から知られておるが昭和三十二年神奈川県的重要文化財に指定された。外郎家には元禄十一年早雲寺住職宗貞が記した同家の系図があり、一方早雲寺には外郎家と交渉の文書が残っている。これらの点からして、両寺家の間に深い関係のあつたことが窺えるが、早雲寺の開山以天宗

清和尚(大隆禪師)は京都大徳寺住職であつたのを北条氏綱が招いて、父早雲の菩提寺として早雲寺を建立して開山せしめたものであるし、外郎家も氏綱の招きに応じて京都から小田原に移り住んだのであつて、両者の小田原下向が大永元年と伝えられるところなどからすると、両寺家には余程深い関係があるらしく考えられるので、その点から外郎の虎の絵を考えて見ると早雲寺の虎絵と外郎家の虎の間に因縁があるらしく同一人の作品とまでは申し難いかもしれないが、同系統のもので、時代も余り隔たぬ時期に描かれたものであらうと思われる。

ところが、この外郎の虎の絵は幕末の文政二年二月四日の大火の際に焼失してしまつたので、この東海道名所図絵所載の絵図などは、往時の面影をしのぶ貴重なものとなつた。

この小田原大火は俗に半蔵火事と言われていて、筋違橋町に住んでいた大工の半蔵という者が同僚と喧嘩して火鉢を投げ付けたことか

ら発火して、この日朝からの強風であつたから火が止

まらず、筋違橋から山王松原までの間城下町の半分以上焼失したという小田原未曾有の大火で、小田原城三の丸の勘定所なども全焼した。外郎家は火元に近いところにあつたので出火後間もなく灰燼に帰してしまつて、惜しいかな、名物の両虎の襖絵も取り出すひまもなく失われたのであつた。

### 久野史談会行事

#### 久野史談会報

久野史談会では、一月十五日午後三時から役員の新年会を開いた。十五日は成人式が行われるし、大体公民館に出かける人が多いのだから、という考えでこの日を選んでのだが案に相違して、むしろ都合の悪い日になり、集つた者九名という次第。然し、山田一郎会長の提案で三十七年度の行事に就いて検討することに

なつた。そこで本年度に於ける主な行事を拾つてみる

- 一、古墳その他遺跡の清掃修理。春秋彼岸ころ一回
- 二、古墳供養
- 三、部落懇談会の続行

そこで、虎の絵のなくなつた外郎家では、以後はこれに代つて家宝の木彫の虎を店先に飾つたが、これも大正十二年の関東大震災のときに失われてしまつた。虎のなくなつた外郎家を今は虎屋と呼ぶ人はないが、家業はますます繁昌してゐる。

### 須藤町呼称の由来

小田原銀座 永田 清助

明治二十八年の頃少年時代其頃古老の語す処元此の地は北条氏の家臣須藤氏の邸宅の跡にして城の外濠に位置し可成深く大きく在つた。其後北条氏滅亡後豊臣秀吉公は此の小田原を徳川家康公に与ふる処となりて家康公は江戸に築城し其の譜代の臣なる大久保忠増を据え關西への抑へ江戸の防備の主要地点とす。忠増公は家康公の許可を得て北条時代の城跡の整備を志し此の須藤町側に位置する外濠を埋めて縮小新しく元幸田門跡の位置より東郵便局並んで御幸ソバ店より南、中央公民館迄大手門入口より南野地酒店迄、又西して箱根口迄と修造す。維新前迄は斯く呼称したるも維新後は緑一丁目通称小田原銀座商店街は地下約四米突に壕底あり其四米突区間は地盤脆弱にて二米突以下は黒泥土の沼状を呈し真孤が出て来る益景等に用いて好適なるゲト土層です。埋立の濠跡旧須藤町は大型トラック砂利砂運搬車通過には二

#### 訂正

菱田天峰作詩  
壬寅新年の詩中  
誤新月 正新年

#### 編集だより

(一) 二月中に史跡めぐりをする予定のが、四月一日の第一日曜日と決つた。  
詳細は後報します。  
本紙の原稿を募集いたします。お気軽にたとしお寄せ下さい。

#### 第七号

昭和三七二年二月一五日発行  
(毎月一回発行)  
会費 一ケ年三百六十円  
発行人 小田原史談会  
編集人 機関紙発行委員会  
発行所 小田原市幸一丁目郷土文化館内  
小田原史談会

<p>電話(0465)二四四九番 小田原市十字三 平野商会 <b>平野久雄</b></p>	<p>写真 <b>イガラシ</b> 小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器 <b>江島屋</b> 小田原箱根口 電話6602</p>	<p><b>志澤</b> TEL3131</p>
---	---	---	------------------------------

<p>株式会社 <b>小田原百貨店</b> 社長 神戸英次郎</p>	<p>明るい生活 楽しい読書 <b>八小堂</b> 小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社 代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社 <b>大雄山線</b> 運営事務所</p>
--	---	---	---

<p>あなたの洋品店 <b>はふや</b> 小田原幸町 TEL2307</p>	<p><b>小田原信用金庫</b></p>	<p><b>きそば庵</b> 小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗 小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	-----------------------	--	--

<p>高級陶器の店 小田原市緑1~103 小田原銀座通り 株式会社<b>江島屋陶舗</b> TEL(0465)5427</p>	<p>梅衣 甘露の衣 小田原駅前 <b>正栄堂菓子舗</b> 電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店 <b>花田屋</b> 小田原銀座2 電話3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う <b>カメラの光輝堂</b> 小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
---	---	---	---

<p>便利で 楽しいお買物は 小田原駅前 Ⓜ箱根登山デパート</p>	<p><b>箱根登山鉄道株式会社</b> 電話小田原(0465)4111</p>	<p>西洋料理 御土産各種 <b>あさひ</b> 小田原駅前 TEL2680・2681・3051</p>
--	--	--

<p>御料理御弁当 株式会社<b>東華軒</b> 代表取締役 飯沼相三郎 小田原駅前 TEL(0465)5061~2</p>	<p>純良医薬品 株式会社<b>オタワラ薬局</b> 錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華 <b>松屋</b> 小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>松菓 銘菓 千代菊 銘菓 甘露梅 銘菓(県指定の店) 電話2376 <b>集栄堂本店</b></p>
--	--	--	---